

令和 6 年度

心の輪を広げる体験作文

障害者週間のポスター
作品集

群馬県／群馬県肢体不自由児協会



あいさつ

群馬県知事

山本 一太

「心の輪を広げる体験作文」、「障害者週間のポスター」の募集に多くの方々から御応募をいただき、深く感謝申し上げます。今年度は、県内の小中学校・高等学校等の児童・生徒の皆様から、作文の部で三十九作品、ポスターの部で十三作品の応募がありました。どの作品も、障害のある方への思いやりの気持ち、障害を乗り越え、強く生きようとする思いなどが込められており、大変感動いたしました。県民の皆様の中に、このような気持ちが育まれていることをとてもうれしく思います。今回は、この作品の中から十二作品を優秀作品として表彰することにいたしました。

県では、「全ての県民が、障害の有無にかかわらず、互いに人格と個性を尊重し合いながら、地域で共に暮らし、支え合い、安心して暮らすことができる共生社会の実現」に向け、様々な施策を実施しております。この作文・ポスターの募集もその一環であり、このような文化活動を通して、障害のある方への理解を深めていただくとともに、障害のある方の社会参加が更に進むことを強く願っております。

結びに、作品の応募に当たり、御協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げ、あいさついたします。

令和六年十二月

入賞作品

心の輪を広げる体験作文【知事表彰】

■小学生部門

最優秀賞	世の中の便利なもの	太田市立鳥之郷小学校	五年	天笠 翔太	1
優秀賞	体そうの友だち	太田市立鳥之郷小学校	二年	鈴木 陸功	2
佳作	病院のでき事	太田市立綿打小学校	四年	荻野 咲心	3

■高校生部門

最優秀賞	「障害」ってなに？	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	二年	大城 はづき	4
優秀賞	一人一人の個性を大切に	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	二年	北村 悠依	6
佳作	周りをよく見て	群馬県立吾妻中央高等学校	一年	青木 美桜	8

心の輪を広げる体験作文【肢体不自由児協会会長表彰】

■高校生部門

障害とは

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 永島 佳奈

……

障害者週間のポスター【知事表彰】

■小学生部門

最優秀賞 やさしい心

みなかみ町立新治小学校

三年 田村 愛莉

■中学生部門

最優秀賞 努力の結晶

高崎市立片岡中学校

二年 高橋 琉那

優秀賞 世界の輪

藤岡市立西中学校

三年 堀口 楓

佳作 助け合って明るい未来へ

伊勢崎市立第一中学校

一年 木田 蒼依

障害者週間のポスター【肢体不自由児協会長表彰】

■中学生部門 青春

草津町立草津中学校

一年 朝日 詩歩

心の輪を広げる体験作文

【知事表彰】



世の中の便利なもの

太田市立鳥之郷小学校

五年 天 笠 翔 太

耳が聞こえない人にとって大事な言語はなんでしょうか。

それは「手話」です。

多くの両親は耳が聞こえないので、日常生活で「手話」は欠かせないものです。

そして生活している中で「手話って便利」と思うことがあります。

○風邪などで声が出づらいつきに会話ができる。

○静かな場所で声を出さずに会話ができる。

○まど越しでも会話ができる。

○少しはなれた場所でも大声を出さずに会話ができる。

このようにメリットがたくさんあります。

お父さんは手話サークルと手話講習会で講

師をしていて、お母さんも小・中学校で手話教室の講師をしています。

これをきっかけに手話のことをもっと知ってもらい、ろう者とかべを無くしコミュニケーションができればいいと思います。

ぼくもお父さんといっしょに手話サークルに行き、色んな手話を学んで帰ってきます。

手話ができなくても他に方法があります。

身ぶり、筆談、翻訳アプリなど、これらのものがあればコミュニケーションができます。

日常生活には不便利な物を便利にさせる物がいふつかあります。

ろう者は電話ができません。そのかわりにFAXやLINE、テレビ電話、電話リレーサービスでの対応をしています。

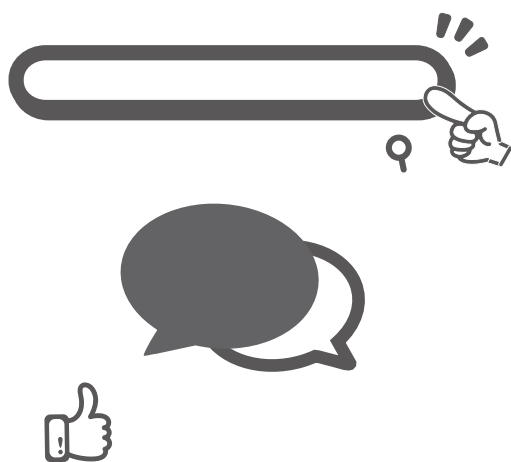
げんかんのインターホンも聞こえる人いれば聞こえない人もいます。聞こえない人の場合はフラッシュライトで伝えます。

目覚まし時計の音もわかりません。その場合は振動で起こします。

テレビでは字幕で内容を知ります。

このように今は、ろう者が使って便利と思う物がふえています。昔は不便なことがたくさんあり、苦労したそうですが、時代にもない便利な世の中になってきています。

これからろう者にも他の障がい者にも差別なく、平等で便利な世界になれたらいいなと思います。



体そうの友だち

太田市立鳥之郷小学校

二年 鈴木 陸 功

ぼくは、体そうのきょうしつに、かよっています。そこには、五年生だけど、ぼくよりせが小さい友だちがいます。その友だちは、ダウンしようだそうです。

その友だちがレッスンをうけてるときは、いつも、お母さんがそばについています。そのりゆうは、けがをしたり、だれかのじやまをしたりしないようにみまもっているのだと思います。

その友だちは、たまにいっしょにならばないうときがあります。それから、ちがうところに行きそうなきもあります。そういうとき、ぼくは、おいかけてあげたり、手をつないでいっしょにもどってあげます。

その友だちが、マットをずらしたら、なお

してあげています。

ときどき、ぼくの手をつかんだりうでをひっぱったりして、いたずらしてきます。ぼくはしかたがないと思って、そのままやらせてあげます。

その友だちのお母さんから、

「いつもありがとう。」

といわれると、ぼくは、うれしいです。

その友だちが、あたらしいわざをおぼえてくれるとぼくも、うれしいです。さいきん、マットの前回りをおぼえました。

ぼくは、その友だちとレッスンをうけると楽しいです。これからも、ときどきお手つだいをしてあげて、みんなで楽しく、体そうを上手になりたいと思います。



病院のでき事

太田市立綿打小学校

四年 荻野 咲心

病院の待合室での事です。声は出さず、両

手を動かしている人がいました。お母さんに、「あの人が何してるの?」と聞くと、「あれは手話といって手でお話しているんだよ。」と言われました。すごいなーと思いきや味がわき、家に帰って手話について調べてみました。自分の名前、動物等色々やってみました。覚えたものをお母さんに見せにいくと、お母さんも昔少しやってたよと、「大きな古時計」を見せてくれました。お母さんは、小学校の頃学校のクラブで手話をやっていて今も覚えているそうです。

私もやってみたくなり、お母さんに教わって大きな古時計ができるようになりました。初めは大変だったけど少しずつできるよう

になるとうれしかったです。

今回病院のでき事があり、手話を学ぶきっかけができてよかったと思います。口で話すと、早口で話せたりできるけど手話はそんな事できないということ、一本指を出さないだけでちがう言葉になってしまうことの大変さがわかりました。

私のしょうらいのゆめはかんごしさんなので手話をもっと覚えてしょうらいのために、がんばりたいと思いました。



「障害」ってなに？

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 大城 はづき

みなさんは「障害」と聞くと何を思い浮かべますか。私のイメージは、人の体の不自由さです。「障害」の定義は何なのか、障害のある人との関わりについてお話ししていこうと思います。

まず、「障害」とは何か調べてみました。障害者基本法によると、障害者を「身体障害、知的障害、精神障害、その他の心身の機能の障害がある者であつて、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう」と定められています。これをわかりやすく言いかえると、体や心のどこかがうまくはたらかないために、不便なことや困ることがずっと続いている状態のこと。また、その人を取り

まく環境に不便さを感じることもだと言えます。この「障害」に関する私の経験をお話ししようと思います。

私は6歳の時、ダウン症の方と初めて関わりをもちました。その人は私より年が一つ上の女の子で、私の家にピアノを習いに来ていました。ある日、その子のピアノのレッスン終わりに送迎を待っている間に一緒に遊んでいました。そしたら突然、頭をたたいてきたのです。その時私は福祉について知識もなかったし、小さかったので頭をたたいてきた理由がまったくわかりませんでした。今になって考えてみると、言葉は発せないけどその時何か嫌な事があつて、拒否の反応をしていたのかなと思いました。その時は「なんだ、

痛いな。」としか思っていまじませんでした。今考えるとその子なりにできる最大限の感情の表し方なのだと思います。私はこの人以外にも車イスに乗った同級生がいて、「身体的な障害」のある人とも関わる機会がありました。その時私は小学生で車イスという物めずらしさから、その同級生に興味を持ち、仲良くなるために沢山話しかけました。私は車イスをどかしてあげたり、色々な事をお手伝いしたりしました。その当時は善意としてやっていましたが、今考えてみると残存機能を動かすどころか手伝うのではなく、何でもかんでもやってしまっていたので、良くないのだと思います。

最後のエピソードは、私の祖父の話です。私の祖父は、私が中学一年生の時からアルツハイマー型の認知症になりました。当時中学一年生だった私は、認知症になり、トイレに行けずオムツをパンパンにしたり、免許を返納したのに車に乗ろうとする祖父の姿を見て理由もわかりませんが、胸がキュツとなるくらい悲しくなりました。しかし、大好きな祖父のため、危ない事は止めるし、トイレも付いていくなど色々な手助けをしました。その時の私は、手助けをしていたつもりでしたが、

それは症状を治す時間をさまたげていたのです。

このように思った理由は、福祉を学び始めたからです。私は高校に入学し、福祉について学ぶ系列に入ったことで考える時間が多いため、学んでいく中で「障害」をもつ人との関わり方が少しずつわかっていきました。また、先ほども話した通り祖父が認知症だったので、その当時感じたものと学んだことを合わせて考えてみた結果、あのように思いました。

それに加え、夏休みにインターシップに5日間行った中で学んだ事が関係していると思います。私の行ったインターシップ先は、特別養護老人ホームの平均年齢九十歳以上の認知症の方々の所です。インターシップ先では祖父とは違い、発語困難な方もいて、言葉のコミュニケーションができないため、行動や目の動きでコミュニケーションをとるのでもとても難しかったです。そのような「障害」のある方にも、尊厳があり、一人の人として心があるので、自分の周りの人と同じように接するべきだと思いました。

私はこのインターシップで認知症、発語困難、身体障害のある方と関わりをもち、5日間という短い間で「障害」のある人とう関

わるのか、偏見を持たず、尊厳を守るとわかりました。これからも考えを深め、沢山の人が幸せに笑顔に暮らせるようにしていきたいです。



一人一人の個性を大切に

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 北村 悠 依

「みんながつてみんないい。」これは誰もが知っているであろう金子みすゞさんの言葉です。私は誰も、何一つ同じものではなく、だからこみんなすばらしい。この言葉が私は一番好きです。

今年の夏にインターンシップがありました。私はインターンシップに行き、多くの障害者の人たちと関わりを持ちました。私が行った施設には、認知障害の人や麻痺持ちの人がたくさんいました。そしてそこにはとても興味深い症状の人がいました。その症状は、「チック症」という病気です。

「チック症」とは主に、まばたきや咳払い、首振りや奇妙な声が本人の意思に関係なく繰り返し出てしまう疾患のことです。インターンシップ初日に耳に入ってきた声が、「アッ

アッ」という声が聞こえました。落ち着きがなく、ずっと動いている利用者さんがいて、私はなんだろうと気になって施設の人に聞いてみたら「チック症」という症状だと知りました。私はそんな症状もあるんだなと思いました。

私は障害者と関わりをもつまでは全然障害については何も興味が湧きませんでした。町中ですれ違うたび、「かわいそうだな」「大変そう」だと何も感じずに思っていました。私には車イスの友達や、チック症に似た障害を持つ同級生がいました。上記の通り、自分の意思なしに声が出てしまう症状なので、別教室での授業なのに同級生なので関わりが全然ありました。

障害の子が教室に顔を出したとき、「うる

さい」や「なんで来たの？」などと言う人もいました。私もその人たちと一緒にと思いました。そんなこと思ってもいないのに周りに流されて同じになって言っている人もいました。今思うと最低、惨めだなと思います。

その子はそれ以来、見かけなくなりました。あとから聞いた話で、その子は障害を持つても明るく過ごしていたと知りました。

施設でもチック症の人のことを「うるさいね」という高齢者がいました。施設の人が、「Aさん、そんなこと言ったらBさんが傷ついちゃうよ。」と言っていて、私は胸が痛くなりました。言っていた人は障害持ちの人だからともかく、私は普通に言っしまいました。

私はチック症の利用者さんとお話することになりました。

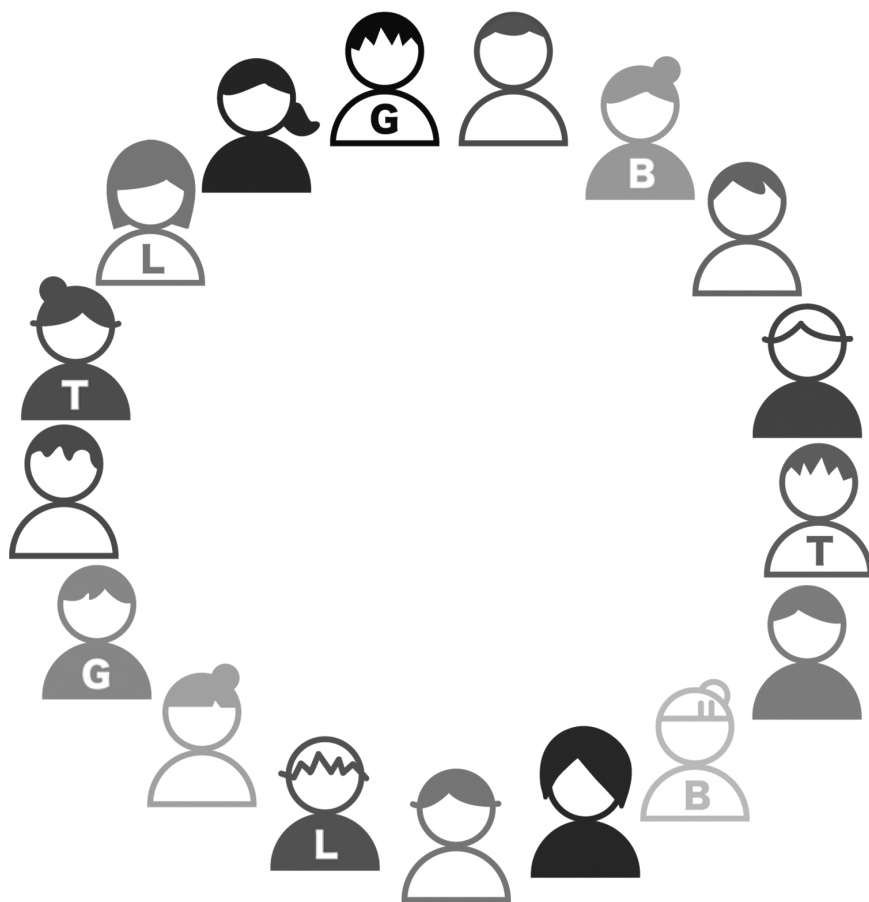
するとその利用者さんの最初の一言目が、「うるさい？」でした。前の私は「少しは。」と言っていたと思いました。しかし私は、「うるさくないですよ。」と返しました。

その利用者さんはチック症のほかにも「吃音症」という、上手く言葉が話せない症状もありました。それに対して「上手く言葉が話せなくて…」と言っていました。私は何も言えず、申し訳なかったです。やっぱり私は

まだ未熟だったなと思ってしまいました。けどその人は、「ごめんね」や「ありがとう」が言える心の優しい人でした。今思えば、同級生の子もお礼が言える心の優しい子だったなと思います。私はそんな心優しい人のことを「うるさい」と思っていたと思うと謝りたくなりました。

私たちが普段普通に日常をおくっている中、障害のある方たちは人の目を気にしながら生活していると思いました。なりたくて障害持ちになったのではないと思います。一人一人異なる個性を持っているように、障害者の人も一人一人すてきな個性を持っています。障害がある、ないなど関係なく誰もが社会の一員なのです。これから先、一人一人が社会に貢献していけたらいいなと私は思っています。障害があるからなんだ。人と違うからなんだ。障害があっても同じ世の中を生きる人間なんです。

私は過去の自分に「障害者も自分と同じ人間なんだよ」と言いたいです。過去のあやまちを反省しつつ、誰もが輝けて楽しく生きられる世界を作り上げていきたいです。



周りをよく見て

群馬県立吾妻中央高等学校

一年 青 木 美 桜

私は、小さい頃から一年に一度、大学病院に行っている。そこで私が体験したことがある。

私がまだ小学校低学年の頃、車いすの女性がエレベータの前で止まっているのを見た。

多くの人が利用するため、エレベータも混雑していた。その日は特別かなり混雑していた。

その階に来るエレベータは全て満員だった。

そのため、その女性は乗ることが難しかった。2回ほどエレベータがすぎ、次に止まったエレベータで何名かのお医者さんが乗っていた。中に乗っていたお医者さんは、その女性が乗れるよう、後ろから、車いすを押す先生、エレベータから降りる先生、安心安全に乗れるよう、ドアがしまらないように

押さえる先生と役割を決めていたかのような素早い行動に私は衝撃を受けた。その時の私はまだ小さく、その先生方の行動を疑問に思う部分と、自分もこのような先生方のようになりたいと思うようになった。

私が印象に残っている疑問点がある。それは、先生方の行動である。テキパキと役割が決められていたかのように動く先生方、誰一人として不安な顔をせず、笑顔で行動していた。今、私が考えるとこれは、周りを見て行動すればできる行動だと思った。しかし、表情の部分では、こんな場面だったら今の私には難しいと思う。なぜなら、行動することに精一杯になってしまうと思うからだ。安心安全にサポートし、エレベータに乗っていただ

く声かけが必要だ。そのためには自分が不安になつては絶対にいけない。不安はその人に伝わり、一番不安にさせてしまう。それはダメなことだと思う。

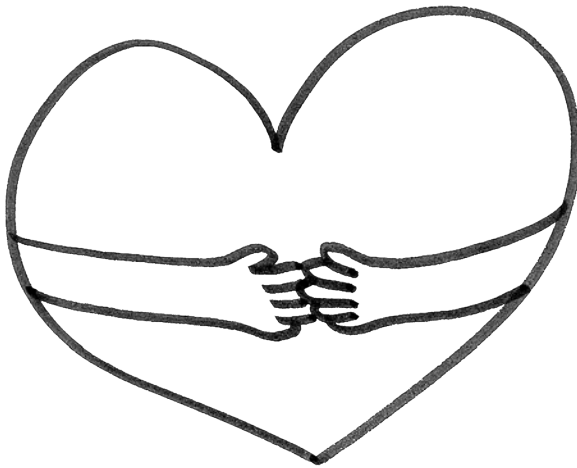
不安にならないために私が生活の中で心がけようと思うことがある。それは、日常生活の中の公共の場面である。例えば、毎日利用する電車、障害の有無は関係なく、混雑している電車では、自分が座っている場合は、周りをよく見るようにしたり、エレベータで、車いすの方や重い荷物などを持つ人、ベビーカーを押す人などがいた場合は階段で行くようにするなど周りをよく見ることを心がけている。しかし、私は自分から、声をかけることがとても苦手だ。どのように声をかけたらいいのか分からず戸惑ってしまうことがある。その時は、鏡を見て、「私は大丈夫。できる。」と3回心の中で言い、深呼吸をしてから、声をかけるようにしている。初めは、上手いかないかもしれないが、少しずつ自信をつけ、緊急の場面やこのような困っている人がいた場合に即座に行動できるようになりたいと思いい、日々心がけている。

誰もが安心安全に生活できる社会にするために私たちにできること。それは、一人一人

が知識を覚えることが必要だと思う。障害のある人には内部障害といい、見えづらいので障害と分かりづらく気づきづらい人などもある。なので、周りをよく見て行動する必要がある。例えば、駐車場では車いすマークや障害者マークがある所には車を停めないようにしたり、電車の優先席には、あまり座らないようにするなど、一つ一つの行動を考える必要がある。少しずつみんなが意識することで、助け合いの輪が広がり、社会がもっと過ぎしやすくなっていくと思う。そんな社会にしていけることを願っている。

まとめ、私が体験したことをまとめ、感じたことと考えたことがある。それは行動することは簡単なことではないということである。行動することは勇気がある。不安になつてしまつて戸惑つてしまうかもしれない。でも、私がまとめたように、一つ一つの行動に責任を持ち意識することで心と心が通じ合うことができると思う。また、この先生方のように素早い行動はまだ難しいと思う。周りを理解し、考え、行動することはできたとしても、早くはできないと思う。そのために、学校の授業でしっかり知識をつけたり、家族で買い物に行く時などや学校の登下校などで周りを

よく見て、病院の先生方のようになりたいと思う。また世界中で助け合いの輪が広がる社会になることを私は願っている。



心の輪を広げる体験作文

〔肢体不自由児協会会長表彰〕



障害とは

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 永島 佳奈

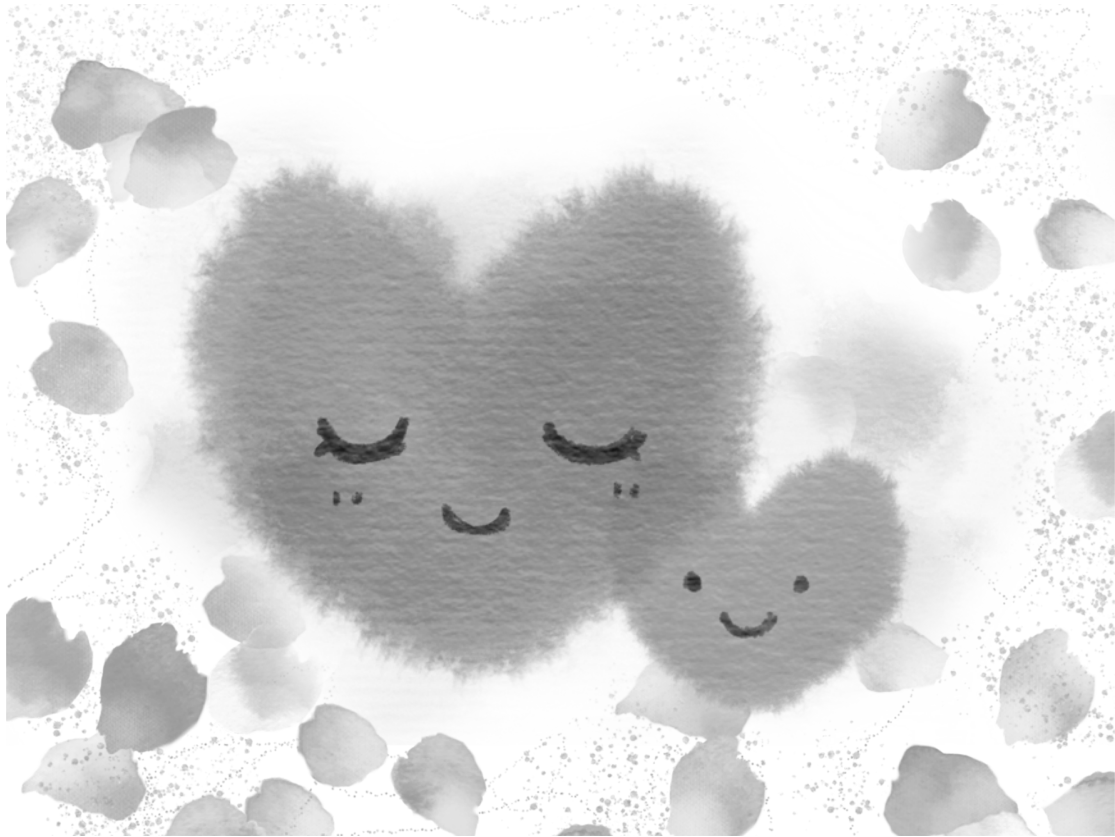
授業で二週間にわたり計四時間行われた講演で「障害とはなにか。」と聞かれました。

もちろん障害なんて目が見えなかったり、歩けなかったりして普通の人は違うことだと思っていましたし、私以外の講演を受けていた人達も同じ様な考えでした。しかしなぜか講演を受けた後には、私もみんなも考え方が変わっていました。一週間目の講演では、一枚の写真を見せられました。その写真には、車椅子の女性が数段ある階段を登れず困っているものでした。女性の奥の店には商品がたぐさん置いてありましたが、そのたぐさんの商品は積み上げられてあったり床に置いてあったりしました。そんな写真を見せられて障害とは何かと聞かれ、考えてみると女性自

身ではなく周りの環境が障害だとみんな考えました。一週間目の講演では障害とは障害をもっている人自身のことではなく周りの環境のことだと考え直すことができました。二週間目の講演では、障害をもっている人ともっていない人が逆の人口になり、障害をもっていない人がどのような生活を送ることになるのかというビデオをみました。そのビデオの主人公の障害をもっていない男性は外を一人で歩いているだけで周りの障害をもっている人達に変なものをみる様な目で見られ、「危ないから一人で歩かない方がいいよ。」などと言われてしまいます。図書館へ行くと本が文字ではなく点字で書かれており、みんなが使えるパソコンコーナーのパソコンも普段の

パソコンとは違う操作が複雑なものでした。このビデオからは、周りの環境の障害に加えて周りの人の目線や障害をもっていない人に対する態度も障害だと思いました。このビデオでは障害をもっていない人がめずらしいので変な目で見られたりしていましたが、実際の社会では障害をもっている人が変な目で見られると思います。障害をもっている人達は、特別扱いをしてほしいわけではなく障害をもっていない人と同じ扱いをしてほしいと思います。実際にボランティアで障害者の方々や交流する機会がありました。そこではボッチャと輪なげを個人戦で勝負しました。車椅子の人はなかに負けるわけがないと思いましたが、気をつかった方が良いのかとまで思いました。しかし、ボッチャは力や体の大きさが関係なく勝負できるので私は本気で勝負したにも関わらず負けてしまいました。車椅子なので床に置いてあるボールを取ったりすることは手伝ってもらわないといけません、勝負はその人自身が行うことができていました。そんな講演やボランティアを通して一番初めに聞かれた「障害とは何か。」を今答えるとするなら、自信をもって、障害をもっている障害者自身が障害なのではなく、障害者が不自由

に暮らすことになる社会が障害だといえます。
昔よりは障害者に対して暮らしやすい世の中になってきていることが目に見えてわかりますが、まだまだ配慮が足りない部分も多く見かけます。そんな障害を今後取り除くことが大切だと思います。



障害者週間のポスター

【知事表彰】





最優秀賞

「やさしい心」

みなかみ町立新治小学校

3年 田村 愛莉



最優秀賞

「努力の結晶」

高崎市立片岡中学校

2年 高橋 琉那



優秀賞

「世界の輪」

藤岡市立西中学校

3年 堀口 楓



佳作

「助け合って明るい未来へ」

伊勢崎市立第一中学校

1年 木田 蒼依

障害者週間のポスター

【肢体不自由児協会会長表彰】





「青春」
草津町立草津中学校
1年 朝日 詩歩

……豆知識……

手足の不自由な人のために

○階段で車イスの昇り降りを手伝うときは、二・三人で昇りは前向き、降りるときは後ろ向きで、車イスの人が落ちないように気をつけましょう。

○松葉杖の人や義足の人などが乗り物で困っているのをみかけたら、進んで席をゆずりましょう。

○雨の日は松葉杖の人が困る日です。傘はさせないし、足下はすべる危険もあります。松葉杖の人を見かけたら、守ってあげましょう。

○手足の不自由な人を見かけても、すぐ手を貸す必要はありません。困ったときや助けを求められたときに、はじめて手を貸してあげてください。

手足の不自由な人たちは、人に迷惑をかけるのを、とても心苦しく思うのです。それだけに、こまやかな心づかいが必要です。

令和六年度

「心の輪を広げる体験作文」
「障害者週間のポスター」

作品集

令和六年十二月 発行

発行所 群馬県健康福祉部福祉局障害政策課

群馬県肢体不自由児協会

〒三七一八五七〇 前橋市大手町一―一―

☎〇二七（二二六）二六三四